

保育ゼミにおける実践活動 —ともいきフェスティバルに参加して—

鳥丸 佐知子

『保育ゼミ』だからこそできる実践活動とは何か。この数年さまざまな試みを続けている。本論は今回初めてゼミ単位で参加した「ともいきフェスティバル」の報告である。近年、ますます短期大学に求められつつある地域との連携や交流。その体験が学生の学びの中で、有意義なものとして取り込まれ、将来に生かされるものにするために、どのような工夫や注意が必要なのか。実際に参加したことで見えてきた、地域貢献と授業の在り方について探る。

キーワード：保育ゼミ、ともいき、地域交流、実践活動

1. はじめに

明治37年の高等家政女学校創設に端を発する京都文教学園は、仏教精神に基づく人間教育を標榜し、幼稚園・小学校・中学校・高等学校・短期大学・大学・大学院を擁する総合学園として発展し、平成26（2014）年、学園創立110周年という節目を迎えた。

京都文教大学では、この年に合わせて地域協働研究教育センターを新設し、地域における大学の教育、研究、社会貢献を一体化し、地域・学生・教職員を巻き込んだ総合的な取り組みを支援・推進しようとした。またその成果を大学の教育活動や地域の発展に還元、寄与することを使命とした。今回初めて参加させていただいた「ともいき（共生）フェスティバル」は、そのセンター設立記念事業として始まり、現在に至っている。

フェスティバルの目的は地域の人々に向けて大学を開放し、子どもから年配の方、障がい当事者や留学生等、様々な人が集い、楽しみながら交流する場の創造を目指している。

初年度はサロン・ド・パドマを会場に、メイ

ンステージでの中国琵琶演奏や記念講話、宇治茶文化の講座、障がい当事者のトークセッションなどが行われた。また室内にはボランティア活動などの展示コーナーが設けられ、ワークショップや体験コーナーなども作られた。また模擬店での手作りの品の販売、ゆるキャラがやってくるなど様々な催しが企画された。

年を追うごとに、会場はサロン・ド・パドマのみでなく、弘誓館や14号館、常照館やグランドへと広がっていった。しかしその催しの対象者は、小学生以上の子どもと大人というイメージは拭えないところがあった。そのため、平日は子育て支援の場としてにぎわっている「ぶんきょうにこにこルーム」は、フェスティバル当日も開放されているにもかかわらず、トイレ利用者等数名が訪れるだけで、閑散とした雰囲気漂わせていた。

フェスティバル会場を訪れる地域住民の中には、就学前の乳幼児と一緒にフェスティバルに参加する人もいる。また通常は、子育て支援の場として「ぶんきょうにこにこルーム」を利用している人もいた。しかし、その年齢（主に乳

児)を対象とした催し物は、そこまで皆無の状態が続いていた。

平成29(2017)年、短期大学には幼児教育学科があるのだから、例えばゼミ単位で、このフェスティバルに参加してみてもどうかという話が持ち上がった。

鳥丸ゼミでは前期と後期に各1回、グループ単位で「ぶんきょうにこにこルーム」での実践活動を行っている。ここでの対象は、主に2歳以下の乳幼児とその母親である。この実践は保護者との関わりも可能になり、ゼミ生にとって大変有意義な体験となっている。しかし主に「乳児」とその母親との関わりが多かった。

保育の現場には「幼児」も存在する。現場に出てからは、地域交流なども含め、幼児やそれ以上の年齢の子どもと関わる機会も多くなるだろう。もし在学中に1度でもこれらの年代の子どもと関わるができる実践の場があれば、学生にとっても、意味のある良い経験となるのではないか。そこで新たな試みとして「ともいきフェスティバル」への参加について、ゼミ生に投げかけてみた。

反応は予想以上に良かった。将来、保育の現場で働く者がほとんどであると考え、地域住民との交流経験の一つとして、小学生などもターゲットにしたこの実践も、やってみる価値があるのではないかという意見でまとまった。そこで授業の一部として、初めてこのフェスティバルへの参加に挑戦することになった。

この年、ゼミ単位の参加は、鳥丸ゼミ以外にも、岩佐ゼミと伏見ゼミが参加した。それぞれのゼミの持ち味を生かしながら、良い経験となったと感じている。本論は、初めて参加しての実際の様子や、良かったところや反省点、今後に向けての問題点、学生の感想等をまとめたものである。

2. 実践の概要

ともいき(共生)フェスティバル2017

*日時

2017年12月9日(土) 10:00～16:00

*会場

京都文教大学 サロン・ド・パドマ 他

当日は複数の会場で、並行して、さまざまな催しが繰り広げられた。多世代交流ステージ・ともいきブースとしてのサロン・ド・パドマをメイン会場に、弘誓館や14号館、グランド、恵光館(学生食堂)、おやこサロン(子育てサロン)(=ここが平日はぶんきょうにこにこルームとして地域住民にも開放されているところである)、同唱館も会場になった。

これらは大きく『A. 楽しく学ぼう!子どもにっこり作戦』『B. 「仏教」・「認知症」・「宇治の観光」の講座等で、じっくり学ぶ!』『C. 地域の皆さんによる、とびっきりの交流ブース&活動発表!』の3つのテーマで分かれ、さまざまな催しが行われた。

多くの行事の中から、今回は、鳥丸ゼミが参加した、A④おやこサロンの概要についてまとめていきたい。

『A. 楽しく学ぼう!子どもにっこり作戦』のグループは、①おうじちゃま・ちはや姫と!「ふるさと宇治検定」大会、②小学生わくわく体験、③子ども野球教室、④おやこサロンの4つに分かれたが、④おやこサロンが、月照館1階の子育て支援室(平日はぶんきょうにこにこルーム)での催しとなる。

ここでは10:00～11:00「ママと赤ちゃんのオーラルケア教室(サンスター)」、11:30～12:00「劇遊び(ふしぎの国のアリス)(伏見ゼミ)」、13:00～15:30「手あそび、うた、大型絵本の



図1 プログラム



図2 タイムテーブル

読み聞かせ他(鳥丸ゼミ)」が開催され、同会場は、授乳やおむつ交換に利用することも可能であるという設定であった。

13:00～15:30が鳥丸ゼミの持ち時間として設定されたが、当日は休日でもあり、ゼミ生の個人的な負担をできるだけ少なくするため、この時間をさらに3等分し、ゼミ生も3つのグループに分けて、自分の持ち時間のみ担当すれば良いように計画した。

鳥丸ゼミは現在16名で構成されているが、当日諸事情により参加できないゼミ生が1名いたため、残り15人を3等分し、5人グループを3つ作った。それぞれの持ち時間に何をするかはグループごとに計画した。このようなコーナーを設けるのは今回が初めてであったため、まさに手探り状態で、どの年齢の子どもが会場に来てくれるのか、それ以前に、そもそもこの会場に人が来るのかという不安もあった。

人を呼び込める可能性があるものは何か考えた結果、プログラムにある「手あそび、うた、大型絵本の読み聞かせ」等の通常の自由遊びとは別に、各グループで、何か参加者が自ら作って楽しめるものを企画しようということになった。その結果、指月祭等でも人気の「プラバン作り」や「スライム作り」に加え、「パルーンアート体験」や「スクラッチ」を加えることにした。

3. 倫理的配慮

実施後の感想をデータとして使用するにあたり、調査対象者にはインフォームド・コンセントを行い、本研究への協力に同意したものを調査対象者とした。回答は任意であること、回答の拒否や中断は可能であり、そのことによる不利益は生じないこと、回答者の名前は伏せ、個人を特定しないものであること、教育・研究の目的以外には使用しないことを口頭で説明し、

了承を得た。

4. 結 果

ともいきフェスティバル終了後、自由記述形式で感想を求めた。ゼミ生16名(参加15名)中12名の回答が得られた。今回は、通常の絵本の読み聞かせや自由遊び以外に「プラバン作り」「バルーンアート体験」「スライム作り」の3つのグループに分かれて実践した。実際に訪れたお客さんも、大形絵本の読み聞かせ等の行事より、実際に自分で体験できる催しに参加者が集中した。そこで3つの実践の内容別に、感想をまとめる。

＜プラバン作り＞グループ

・今回、初めてともいきフェスタに参加させてもらいどのくらいの数のお客さんが来てくださるかもわからないままであり、大きな役割も決めていなかった。

当日、想像以上のお客さんが来てくださってよかった。焼き終わったプラパンをどの人に渡すのかを忘れてしまう時もあったためテーブルごとに担当の人を決めてもよかったと思う。また焼きを担当してくれていた人はお客さんと接する機会も少なかったと思うため、時間で交代すべきであったと感じた。

反省もあったが当日多くの人がきて活動を楽しんでくれたことは非常に嬉しかった。ともいきフェスタに参加し、多くの経験をすることができてよかった。

・実践をしてみて思ったよりもたくさんの子どもたちや保護者の方が来て下さり、プラ板作りも思った以上に楽しんで下さったのでやってみてよかったなと思いました。また、年齢層も広く、関わることができたので良かったです。しかし、予想以上のこともあり、スムーズに進ま

なかったこともあったのでそこを改善できればもっとより良くなったのではないかなと思いました。今後に生かしていくことができる機会になったので良かったです。

・プラ板作りはキーホルダーやネックレスなど形として残るものなので、子どもだけでなく親も楽しめる活動だったと思います。絵を描くことが難しい幼い子どもでもヒモの色を選ぶことができたりして、親子で楽しめる活動をすることができわたし自身も楽しい時間でした。

・50分があつという間に過ぎるほど時間に余裕がなくて、思ったよりプラ板作りは大変だったが、親子が喜んでくれて良かった。

＜スライム作り＞グループ

・思っていたよりたくさんの親子が来てくれたので嬉しかったです。でも、準備不足だと感じました。1時間は思っていたよりも短くて、一瞬で終わりました。最後はみんな笑顔でスライムを作ってくれたりして嬉しかったです。

・思ったよりたくさんの子どもたちがいて驚きました。スライム作りは、はかりがなくて感覚でやってしまっていたので、しっかり用具などを揃えてできたら良かったなと思います。

・普段はニコニコルームでは乳児など小さい子が多いのですが3歳以上の子とも関わることができました。すごくいい機会でした。話すことができる子が多いのでコミュニケーションをたくさんとることができました。

＜バルーンアート体験＞グループ

・いつもゼミで行くよりもたくさんの方が来ていて、たくさんの子どもたちと関わることもできました。風船を曲げたり回してつくったりできる幼児の子どもたちと関わるが多かった。

もう少し乳幼児の子どもたちと関わり風船をどのようにしているか、見ることでよかったと思いました。風船が割れると怖いというイメージがあり、なかなか自分ですという経験ができなかったのも、もっとやりたいと思えるように興味を引き出せるようになりたいと思いました。ともいきフェスに初めて参加し、すごく楽しくていい経験ができました。

・ニコニコルームに入るまでは、どれだけ子どもたちがいて何歳くらいの子どもたちがいるのか想像がつかなくて不安でしたが、想像以上の人数の子どもたちがいて絵本を読み始めると自然と子どもたちが集まってきてとても嬉しかったです。バルーンアートも、子どもたちと一緒に膨らましながらいろんなものを作れて楽しかったです。いい経験になりました。

・私はバルーンアートをグループみんなで協力し、子どもたちが楽しめるようにみんなで少しですが練習しました。本番では風船を見るだけで喜んでくれる子や自分で作りたい！という気持ち伝えてきてくれる子がいて子どもたちにとって興味のある活動であったのかと思い、とても嬉しかったです。ともいきフェスティバルを通してもっとバルーンアートなど保育に必要なことについて、教材研究していきたいです。

・たくさんの親子が来てくれてすごく嬉しかったのと、こんなに参加していただいていたことに驚きました。バルーンアートを楽しんでくれて嬉しかったです。子どもたちが自分で風船を膨らませたい！と言ったり、風船を膨らましては空気を抜いて遊んでいたりと個々で遊びを作っていて、その遊びに合わせて遊ぶのも楽しかったです。自分が想像していること以外にも子どもたちはたくさんの遊びを考えてするなと改めて思い、たくさんのことを想定して保育をしていく必要があるなと思いました。

・思っていた以上に子ども達や保護者の方が来てくださっていて嬉しかった。バルーンは上手く作れるか不安だったし、割れたら大きい音が鳴るから泣いてしまう子もいるかもしれないと思っていたけれど、泣く子もいなくてみんなすごく喜んでくれて、好きな風船を選んで帰ってくる子もいて嬉しかった。

5. 考 察

自由記述形式で実施した感想の結果をもとに、本フェスティバルに参加した意義について、考察する。

結果的に、全員が「参加してよかった」という感想になった。その第一の要因として、ぶんきょうにこニコルームの実践活動では関わることでできない年齢層の子どもたちとのふれあいがあったことがあげられる。

保育の現場には、就学前のすべての年齢の園児がおり、すべてが4月からの保育の現場で彼女らが関わる可能性のある子どもたちになる。また近年、保育園や幼稚園と地域との交流も盛んになってきており、運動会や夏祭り、生活発表会等で様々な年齢の子どもと関わる可能性もある。すべてが経験の積み重ねからと考えれば、今回の経験も貴重な機会となった。

また、いつもの実践対象である乳児ではなく、その年齢（例えば小学生）の子どもだからこそ可能になったことが多くあった。

例えば一緒にプラバンやスライム、バルーンで動物を作るなどの体験ができたことである。ともに寄り添って制作に関わり、その場で子供の反応に触れることができる体験は、彼女らの体験を通しての大きな学びになったと考えられる。その体験から、教材研究に考えが発展していった学生もいた。

これまでの実践体験とは異なる年齢層とのふ

れあいが可能になった今回の体験は、彼女らの今後の糧となるであろう。その点では今回の試みは成功であったと言える。しかし様々な場面で、予想外の出来事が起こったのも事実だった。その最大の原因は、初体験であったことに尽きるのかもしれないが、ゼミ生側が当然と考えていた実践の在り方と、今回の場面で求められる内容にいくつかの食い違いが生じた。

まず最初に、今回3グループに分かれて実践を行ったが、各グループの入れ替わり時間に休憩時間を設けていなかったため、予定していた時間にすべてを終了することができず、次のグループに迷惑をかけることがあった。また自分たちの持ち時間から準備を始めたために、実際の実践に取り掛かるまでに、多くの時間を費やしてしまったグループもあった。

また授業としての実践は、基本的に限られた時間内で何ができるかということがテーマになるが、今回のように授業ではない場面での実践において、実際に実践のために使用する時間とは別に、すべての行事が終わってからの最後の後片付け等もセットでついてくことになるという、改めて考えれば当たり前のことが学生側には認識されていなかった。

これは大学祭等でも同じことがいえるが、学生側にはその認識はなく、その部分に驚くとともに不満を感じた学生もいたようだった。しかし、この体験で得たものも多かったことから、それらの反省を踏まえ、今年も参加するか否かを検討していた鳥丸ゼミであった。ところが今年

は、これとは全く別の新たな流れの中で、「ともいきフェスティバル」が開催されるのと同じ日に、幼児教育学科全体で「ぶんきょう子どもひろば」が催されることになった。こちらは月照館が主たる会場となる。ぶんきょうにこにこルームは、再び以前の状態（トイレ休憩や授乳の場所）に戻りそうな気配である。

一部のゼミの参加ではなく、幼児教育学科全体での地域交流がどのような形で進められていくのか、今回初めての試みで、まだ手探り状態のところも多い。この行事についても、授業との位置づけの問題など、今後新たな課題は山積しているように思われる。地域住民との交流は、学生にとって意味のある体験として得るものも多いが、そのための準備や、その位置づけなど、学生自身にとっても、また担当教員にとっても、過度な負担となることなく、有意義な体験にするために、まだまだ様々な模索が必要であろう。

参考文献

- 1) 鳥丸佐知子 (2012) 保育ゼミにおける実践活動
－子育て支援室「ぶんきょうにこにこルーム」での取り組み－京都文教短期大学『研究紀要』第50集 204-207
- 2) 鳥丸佐知子 (2013) 保育ゼミにおける実践活動
－子育て支援室「ぶんきょうにこにこルーム」での取り組みⅡ－京都文教短期大学『研究紀要』第50集 153-156
- 3) 米倉慶子、木村安宏、野口美乃里、川邊浩史、占部尊士、赤坂久子、金丸智美、春原淑雄、山口玲子、津上佳奈美、樋渡恵理子 (2017) 地域との連携取り組みにおける学生の学び－保育・教職実践演習の学びの一環として－西九州大学短期大学部、47、65-74.